



ポケット
の底

川崎ゆきお

倉橋は鞆のポケットに手を突っ込み、ライターを探した。出かけるとき煙草を忘れたのだ。当然ライターも。

道端で一服吸おうと服のポケットに手を入れるが空振りする。煙草とライターがない。これはたまにある。煙草の予備を鞆の前ポケットに入れておくこともあるが、それは出かけるときだ。残り本数が少ないときに限られる。従ってその日は鞆の前ポケットにはないが、ライターはあった。途中で買うにしてもライターまでは買いたくない。ライターは部屋の中はかなり残っている。いずれも煙草を十個入りで買うと貰えるためだ。それが余っている。だから、わざわざ買う必要はない。ただ、今日のように忘れたのなら仕方がない。百円ライターは途中で点かなくなることがある。使い始めてすぐなのに。そういうことがあるので、鞆の中に予備を入れていた。

煙草のことより、倉橋が気になったのは、なぜ忘れたのかだ。きっと急いで家を出たためだろう。しかし、意外とそんな日ほど忘れ物をチェックする。だが、よく考えると、急ぐような理由はない。それに急いだ記憶もないが、何か普段とは違っていた。

「普段着だ」

涼しくなり始めたので、上着を一枚余計に着て出た。

「これだな」

いつもは胸のポケットに煙草とライターを入れる。だから、少しだけ胸元に重さがある。自分の部屋から玄関までの僅かな歩数の間で、それが分かる。胸元が今日は軽いと。それで、手を当てると、煙草がない。これはたまにある。しかし、今日は、もう一枚羽織った上着には胸ポケットがなく、腰にポケットがある。それで気付かなかったのだろう。

その問題は、もうそこまでで、途中で煙草を買うことで解決したのだが、指先が別のものに触れていた。それは鞆の前ポケットからライターを取り出したときだ。ここには何も入れていないのだ。それこそ予備のライターと煙草程度だ。だから、ライターだけのはず。たまにデジカメを持ち出したとき、その前ポケットに入れる。裸のまま。だから、そこにライターを入れたくなかったが、デジカメを入れる頻度はそれほど多くはない。カメラとライターがこすれ合うのを想像したこともあるが、予備のライターは底の隅で大人しくしていることが分かった。

先程指先で感じたのはライターではない。布だ。鞆の内側を包んでいる生地とは違う。少しザラツトしていた。

「そんなもの、開けてみればすぐに分かる」

と、思うものの、もう少し間が欲しい。当てるための。自分で入れたものなのだから、ああ、これだったのかと、すぐに分かる。しかし、今は見当もつかない。

倉橋は自分で出したクイズを楽しんでいるようなものだ。指にザラツとした感触があり、布のようで、ふんわりとしていた。大きさは分からないが、前ポケットに入るほどのものなのだから、小物類だろう。

数分考えたが、答えが見付からない。これ以上はストレスとなるため、さっとファスナーを引き、中を見た。

女性用の小さな袋だった。

「匂い袋」

そんなはずはない。入れた覚えはない。しかし派手な柄だ。和風の。

そして手に取ると、その長細さですぐに分かった。眼鏡ケースなのだ。当然中に眼鏡が入っている。

倉橋は老眼鏡を使わないと、手元の文字が読めない。いつもは鞆のメインポケットに入れて家を出る。それを何度か忘れた経験があり、出先で困ったことがあった。それで、予備の眼鏡を買い、前ポケットに入れていたのだ。女物なのは、知らないで買ったためだ。レンズが小さいので選んだ。それに付いていたケースが、その和柄だった。

謎も神秘も、深い意味もない。しかし、最初、その着物の布のような眼鏡ケースに手を触れた瞬間、謎の闇がちらりと覆ったのは確かだ。

了